

心を育む子 ～「いのち」を大切に思う心高め合う学習活動～

蒲郡市立形原小学校

1 はじめに

本校では、これまで、授業の中で関わり合い、考えを伝え合い、存在を認め合い、学び合う子どもの姿を目指してきた。自分の思い、他人の思いに共感することは、新たな気づきや発見となる。それらを通して、更なる自分を広げ、高め、未来を担う子どもたちとなってほしい。そこで「心を育む子」の育成を目指し、「いのち」に目を向け、未来の子どもたちの生き抜く力につながる研究を進めた。自分自身を肯定し、自分自身をかけがえのない存在として捉える場面を共有することで、生きている喜びや「いのち」のつながり、他人への感謝の気持ちにあふれる子どもたちになるのではないかと考えた。本年度は、道徳を柱とし、言語活動の充実に重点をおきながら、「いのち」を大切に思う授業や教育活動を展開して、実践を重ねた。

2 研究の構え

(1) 目指す子ども像

「心を育む子」…他者のものの見方・考え方・生き方を大切にしながら、自分のものの見方・考え方・生き方をより良いものにしようとする心を育てあげていく子

(2) 研究の重点目標

- ① 言語活動の充実を図り、子どもたちの思考力、判断力、表現力を高める。
- ② 「いのち」を大切に思う場を設定し、関わり合いの中で心を育む。
- ③ ユニバーサルデザインの視点（焦点化・視覚化・共有化）を取り入れた、効果的な授業支援の手だてを探り、分かりやすい授業を目指す。

3 研究の内容

(1) 言語活動の充実を図り、子どもたちの思考力、判断力、表現力を高める。

子どもたちが心を通じ合わせるための言葉の力を養い、子どもたちの思考力・判断力・表現力を育むために、それぞれの教科領域の特性を生かし多言語活動の充実に取り組んだ。

道徳では、「自分の考えを基に、表現し、自分と異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感する」ための「話し合うこと」「書くこと」を各学年の発達段階に応じて、毎時間の学習過程に位置付けて、取り組んだ。

(2) 「いのち」を大切に思う場を設定し、関わり合いの中で心を育む。

「体験の共有」「感情の共有」などの仲間と関わり合う共有体験の場を保証し、生き生きと感じる「いのち」、つながる「いのち」、かけがえのない「いのち」、生きる喜びを意識した行事の共有体験から、心の動きを共有する年間の行事計画（「いのち」の道徳プラン）を立案した。立案に当たっては近隣並びに他市の小学校から研究紀要や実践資料をいただき、充実した年間計画になるよう工夫した。また、講師の先生から自己の生き方についての考えを深める道徳学習の構想と展開についてご指導をいただいた。

① 各学年の主な道徳授業実践と共有体験

		道徳授業	共有体験
低 学 年	1年	たったひとつのいのちをたいせつに 「いのちがあってよかった」 (3-(1)生命尊重)	がっこうのすきなところをみつけよう！ (1年学活)
	2年	生きているってうれしいな 「ふしぎな音」 (3-(1)生命尊重)	とおくまでとんでけ！ぼくの・わたしの紙ひこうき (2年生活科)

中 学 年	3年	生命あるものを大切に 「いのちをいただく」 (3-(1)生命尊重)	サーカスのライオン (3年国語科)
	4年	命の尊さ 「命の記念日」 (3-(1)生命尊重)	二分の一人式 ~おい立ちを振り返ろう~ (4年総合)
高 学 年	5年	命の期限 「その思いを受けついで」 (3-(1)生命尊重)	たすきはぼくらが引き継ぎます! (5年総合)
	6年	かけがえのない命を大切に 「命のアサガオ」 (3-(1)生命尊重)	わたしたちの生活と政治 (6年社会科)
特別支援		ごめんねは魔法のことば 「ごめんね ともだち」 (2-(2)思いやり親切)	ありがとうの気持ちを伝えよう ~ハッピースマイル ありがとう作戦~(生活単元)

②学びの成果を発表する場の設定

学級、学年、全校で連携を取りながら発表を行った。学級では定期的に朝の会の時間を使って、全員で思いや考えを共有した。

(3) ユニバーサルデザインの視点(焦点化・視覚化・共有化)を取り入れた、効果的な授業支援の手だてを探り、分かりやすい授業を目指す。

■実践例：6年道徳 かけがえのない命を大切に「命のアサガオ」<3-(1)>

手だてA【焦点化】

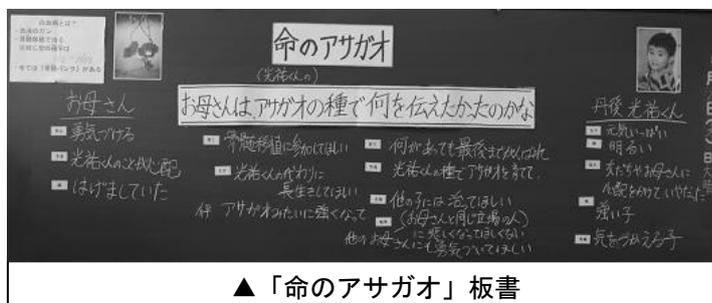
白血病や骨髄バンクのしくみを知り、光祐くんの気持ちに寄り添う。お母さんの心情を追いつつアサガオの種に込められた思いを考えさせる。

手だてB【視覚化】

1年生が育てているアサガオを見せて、自分たちが育てた頃を思い出させる。この話が実話であることを伝え、資料への興味を高めさせる。

手だてC【共有化】

一粒の種を渡し、お母さんが伝えたかったことを発表させる。考えを整理しやすいように考えの流れを記し、顔写真を入れた板書を工夫。



▲「命のアサガオ」板書

学級に、白血病が血液のがんであることを知る子どもは多くいたが、骨髄バンクの存在を知る子はいなかった。骨髄移植で治るための同じ型の確率は、100万分の1であることを伝えることで、光祐くんの気持ちに寄り添うことができた。そして、お母さんの心情を追わせるために、アサガオの種を子どもたちに渡し、

その種に込められた思いを考えさせた。また、自分たちが育てたこともあるアサガオから考えさせることで考えに広がりをもたせることができ、種を渡すことが、骨髄バンクを広め、光祐くんの「いのち」をつなげることであることにまで気付くことができた。人の「いのち」はかけがえのない存在であることに気付き、自分自身や家族にとっての「いのち」と結び付けることができた。さらに一粒の種からお母さんの伝えたかったことを深く考えることができた。講師の先生からは「命の大切さを考えさせる授業の中で、葛藤する場面も設定できるようになると子どもたちの考えがより深まる」といった助言をいただいた。

4 おわりに

「いのち」を一つの切り口としたことで、各部会・学級において「心を育む」学習活動が展開された。教師間での「いのち」の大切さの迫り方について共通理解や意識が生まれ、子どもたちへの願いをもつよい刺激になった。また、子どもたちの心の中に、いろいろな見方があることへの芽生えがあり、真剣に取り組み、考える機会が増えたようである。これからも、心を育む実践を重ね、豊かな心をもつ子どもたちを育てたい。

研究の成果と課題

1 研究の成果

○児童の発達段階に応じて、資料や問題意識に沿った授業の展開を工夫した。ユニバーサルデザインの視点（焦点化・視覚化・共有化）を取り入れ、誰もが参加できる授業になるようにした。焦点化により話し合いが充実し、写真や絵、子どもの意見の流れを示す板書や動作化による視覚化により内容の理解を深めることができた。また、思いや考えを共有化し、友達の考えを認め合おうとする姿勢が身に付いてきた。各学年の実践による成果は次のとおりである。



道徳の授業の様子

1年生では、主人公の女の子が不注意で道路へ飛び出し、交通事故に遭ってしまう話で、みんなが心配してくれたことに触れ、命があってよかったと感じ、自分の命を大切にしたい生活をしていくこと



友達と創りあげる学芸会

に気付いた。

2年生では、命はどうしたら分かるのかと校医の先生に相談した話で、実際に聴診器で自分の心臓の音を聞き、生きていることを実感し、嫌なことでもいろいろと挑戦しようとする子どもたちが増えた。

3年生では、食肉センターに勤める食肉解体作業員の仕事を通して、牛の命をいただく話で、食べ物を大切にする心、全ての命を大切にする心を育てることができ、子どもたちは、何事にも感謝する気持ちをもって行動するようになった。

4年生では、多くの命を見守ってきた助産婦が実際に体験してきた話で、お腹の中ですさまじい速さで成長する赤ちゃんを自分自身に重ね合わせ、母親も自分も頑張ったことに気付く、努力しようとする意識が高まった。

5年生では、小さい頃からかわいがってくれた祖父が余命3か月と医師から宣告される話で、命には限りがあり、生きている時間を大切にしていかなければと友達と確かめ合う姿が見られた。



東日本大震災津波等語り部の話

6年生では、白血病と闘った5歳の子どもが主人公となる話で、かけがえのない命に目を向け、自分たちにできることは、命をつなげていくことだという思いになり、人のために役立つ活動をしていくことになった。

全校では、東日本大震災津波等語り部の方の話の聞き、「いちばんたいせつなのは、いのち」と気付くような行動をしていけばよいのかを考え、意見を発表する中で「友達や家族を大切に」にしていこうとする子どもたちが多く見られるようになった。

○年間計画を作成し、それを基に他教科や特別活動などにおいて結び付けることができ、道徳的実践力を意識して教育活動を展開することができた。

○学級、学年、全校において学びの成果を発表する場を設けたことにより、多様な価値を知ることができ、ただ単に「いのち」が大切であることだけでなく、立場をかえて考えることになり、考えを広げる

深めることができた。

○「いのち」というテーマに絞ったことにより、「いのち」を多面的に捉えようとする姿勢をもつ成果を積み重ねることができ、研究がより具体的に焦点化されてきた。

○研究のキーワードを「いのち」とし、教師間で共通理解がなされ、同じ題材を使って隣学年で実践に取り組んだ。子どもの実態に応じた指導方法や展開例等を情報交換することができた。

○授業研究を実施する際、外部講師を招へいし指導していただくなどの機会が設定でき、通常の授業研究に比べ、より深く実践を見直すことができた。授業分析などにも積極的に取り組み、教員の力量向上を図ることができた。



友達と考えを共有化する場面

○近隣地域の学校から研究紀要をいただき研究の内容を紹介していただいたことで、年間計画作成や道徳の構え、授業づくりにおいて大変参考となり、授業分析において視点を明確にして協議をすることができた。



ワークショップによる研究協議会

○「言語活動の充実」を重点におきながら、子どもたちの思いを捉え、思いのつながりを大切にした題材や単元の展開を考え、主発問や問い返しの発問を工夫したことにより、教師自らの授業づくりの力を高めることにつながった。

○「話し合うこと」では、低学年で「先生との対話」を、中学年で「グループ活動」を、高学年で「他の子どもと自分とのかかわり」を中心に据え、「書くこと」では、低学年では「経験したことや感じたこと」を、中学年では「資料の人物

の考えと比べながら自分の考えを書く」ことを、高学年では「友達、教師等との考えの相違点」や「自分のこれからの生き方を書く」ことを中心に据え、発達段階に応じて内容を重点化したことで、端的に分かりやすく自分の考えをまとめたり、話したりすることや相手の話していることをしっかりと聞いたり、自分の考えと比べたりする姿勢が定着してきた。

2 研究の課題

●よりよい話し合いの授業を目指して、子ども同士の思いや考えを共有して、つなげ、深めていくための教師の発問や問い返し、関わらせ方について、今後も引き続き研究を進める必要がある。

●「いのち」は大切であるということが大前提であることは、子どもたちは理解しているが、考えを掘り下げるまでに至らなかった。

●子どもに付けさせたい力や目指す姿を明確にし、聞く力や読み取る力、そこから得られた情報を活用する力を付けさせたい。副読本や資料などをどう学びに生かしていくのかの研究を進めたい。

●教師自身が本実践で培った授業力を他の教科や特別活動等に広げていきたい。授業を構想する力、子どもを捉えて授業に生かす力は他教科の指導に生かせるものである。教科を広げ、その成果が有効であることを検証していきたい。

●現状の授業分析の手法や内容に関して、更に新たな取り組みを導入し研究を進めていきたい。他の研究校の実践や研究機関に学び、引き続き授業分析の向上を図りたい。